
大事なことはすべて失恋から学んだ

坂上文隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大事なことはすべて失恋から学んだ

【Zコード】

Z5839Y

【作者名】

坂上文隆

【あらすじ】

そのとき僕は失意のどん底にいた。あの日以来洋子が電話に出てくれない。本当に終わってしまったのか。僕たちは運命の人ではなかつたのか。洋子のことを強く思ったそのとき、携帯が鳴った。「自分に失恋を乗り越える方法を教えたる!」。彼女は天使のテン。僕がなぜ失恋したのか、そして恋愛する意味についてテンは説き、その日から失恋との壮絶な闘いが始まった。

大失恋① 幸せな人たちの共通点

十一月二十九日、この日に永江公園に来たのは三度目だった。どうしても今日来なければいけないような気がした。しかし来てみたはいいもののここで何をしたいのか、答えはいまだに見つからない。こうして一時間以上ベンチに座つて目の前の光景を眺めているだけだった。

そこにはジョギングで汗を流している人やレジャーシートを敷いて寝そべっているカッフルがいる。親子でキャッチボールをしていたり、兄弟で追いかけっこをしている姿があれば、少し離れたところでは老夫婦が仲睦まじく並んでベンチに腰掛けている。

老若男女を問わずここにいるすべての人があい想いに過ごしているように見えた。幸せと呼べる光景があるとすれば、目の前に広がるこの世界を言うのかもしない。なぜならこれだけの人が集まっているのにみんな楽しそうで顔には笑顔があり、生気に溢れている。そして誰一人としていがみ合っている人がいないのだ。

翻つて日常生活を見ればどうだろう。平日の自分の姿を思い浮かべた。朝の満員電車然り、仕事上の様々なトラブル然り、ストレスに満ちた毎日である。そう思うのは僕だけではないはずだ。同じ人間同士、どうしてこうも違うのか。どこで違つてしまつたのだろう。

答えは「歩く速度にあり」。そう仮説を立ててみた。ジョギングをしている人を見てそう思つた。彼は何も全力で走つてゐるわけではない。周りの景色を楽しみながらゆっくり走つてゐる。そうした目で見れば親子のキャッチボールも山なりで、ボールの速度がゆっくり見えてくるし、遊歩道を歩いている人たちも景色を見ながら、

あるいは連れと会話をしながらゆっくり歩いてくる。

一方で平日の僕たちは田代めからすでに急いでいる。朝の支度から始まって駅のホームや仕事の準備など会社の始業時間にとにかく間に合ひように知らずと駆け足になってしまっている。電車なんてすぐに次がやってくるのに、それを待つ余裕さえ持てずに多くの人が駆け込んで車内アナウンスで注意を受けている。

そんなに急いで何が変わるというのか。無理をして急ぐからストレスになるのであって、この公園にいる人たちのようにゆっくり過ごしてみれば心に余裕が生まれ、それが仕事の進め方に良い影響を与えてくれるかもしれない。それが昨日とは違った今日となり、その積み重ねがいつか目の前のこの幸せな光景になっていくのではないか。すべてはつながっているのである。その第一歩が「ゆっくり歩いてみる」こと。今より少しでいいから速度を落として歩いてみれば見える景色もきっと変わってくれるはず。

大失恋① 幸せな人たちの共通点（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋② 娘の誘いを断るほど大事なもの

「ぱぱー、ぱぱー」

声のした方へ目を向けると、一人娘の千也香だった。小さな体で走ってきたせいか息を切らせていく。それでもよほど僕に伝えたいことがあつたのだろう、切らせた息を飲み込みながら口にした。

「ま、まの、かわりに、ぱとみんとん、してくれる?」

千也香の走ってきた先で妻の真紗子が手を振っていた。

「ああ・・・・」

思わず言葉が漏れてしまった。これまで周りのことばかり見ていたけど僕と千也香、そして真紗子は今、一直線上にいた。何だ、ここにも幸せがあるじゃないか。

恋人や友達、そして家族。そのつながりは通常目に見えない。一緒にいるからつながっているかといえばそんなことはない。同じ屋根の下で暮らしているのに言葉を交わさない親子や夫婦がどれだけいるだろう。作り笑いをして恋人や友達の「ふり」をしている人たちがどれだけいるだろう。しかし、そのつながりが見えたときには特別なものを感じ、そして安心する。僕にはそのつながりが今、見えた。

「ぱぱー?」

千也香は僕の返事を待っていた。さっきまでの息切れはすでになくなっていた。

「パパはもう少しここにいたいから、これでママと一緒にジュースでも買っておいで」。

財布から一人分のジュース代を取り出して千也香に渡すと、肩を落としながら真紗子の元へ戻つて行く。

「千也香、ごめんな。この埋め合わせは必ずするから」

この公園で何がしたいのか？この問いは一人娘のお願いを断るほど大事なものなのだろうか。どうも調子が狂う。幸せや家族について改まつて考えたことなどこれまでなかつたに。それもこれもすべては「あのメール」を見つけてしまつたからだつた。

大失恋② 娘の誘いを断るほど大事なもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋③ 結婚の決め手となつたもの

昨晩、連絡が途絶えて何年も経つ前の会社の同僚からメールが届いた。あまりに突然の出来事で田を疑つた。中村つて「あの中村」だよな？

中村は前の会社でトップ営業マンだった。成績はいつも上位で、全国の支店間でもたびたび入賞を果たして表彰されることもあった。それだけでなく男の僕から見ても男前で、性格もいい。誰に対しても公平で、分け隔てなく接することができる。中村の周りにはいつも人が集まっていた。

完全無欠に見えるそんな中村にも、唯一といえる欠点があった。女性と会話ができるのだ。もちろん仕事上のことであればいくらでもできるが、プライベートとなるとトップ営業マンの話術は微塵も発揮されない。

中村がフられた日、朝まで励ましたことがあった。フられる理由はいつも同じ。「あなたは何も話してくれない」。電話やメールをするのはいつも彼女からで、中村からはほとんどしない。どうして連絡してあげないと聞いてみると、話すことがないと呟く。

「女は話を聞いてもらいたい生き物だろ？なのになぜオレが話さなければいけないんだ」

酒が入った中村は饒舌だった。僕は聞き役に徹した。

「電話をかけてきたって何も話さないんだぜ？あなたの声が聞きたいのか言って。用がないならメールでいいとは思わないか？」

「何だつていいんじゃないか？お前の仕事の話でもすれば喜んで聞いてくれると思うよ」

「そんなのでいいのか？女ってソムリエみたいな、『貴婦人のような』とか比喩を使った愛の言葉をさらやいてもらいたいんじゃないのか？」

中村が女性と会話ができない理由がわかつた。女性を難しく考えすぎているのだ。僭越ながら僕は中村にアドバイスをさせてもらつた。

「お前が良く使つ『相手を褒める技術』を彼女に使つてあげれば、きっと喜んでくれると思うよ」

今度は中村が聞き役に徹して、時折メモを取りながらの恋愛レクチャーが朝まで続いた。

この件があつて中村とは仲良くなつたが、僕が転職して次の会社へ移つてしまつたため疎遠になつてしまつた。

中村から久しぶりに届いたメールの内容は、

「今彼女にプロポーズした。OKの返事をもらつた。すべてお前に教えてもらつたとおりだつた。心から礼を言つよ。ありがと」

僕に教えてもらつたとおりと書いてある。何のことだ？僕は中村に何を教えたのだろう。

近況報告を兼ねて聞きたいことは山ほどあつたが、親友のお祝いに水を差したくはない。手短にメールを返した。

「おめでとう。早くやった。それで結婚の決め手は？」

中村からすぐメールが返ってきた。

「お前の『言だよ

大失恋③ 結婚の決め手となつたもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋④ おはよひ

僕の一言？ますますわからない。その答えを求めてメールを送つたが返事は返つてこなかつた。再度メールすることも考えたがまだ彼女と一緒にかもしれない。答えが届くまでの間、中村に言つたとされる「僕の一言」とやらを思い出してみよつと思つた。

当時の中村とのメールのやりとりがまだフォルダに残つていた。
たとえば九月十四日、

「付き合つて三ヶ月持たずにフラれた。やっぱり話してくれない
からだと。今回はオレ、がんばったのに」

十月十一日、「取引先の女の子が気になつていて。何て声をかけ
たらいい？」

十月二十八日、「何とかデートにこきつけた。どこに誘つたら
いい？」

当時の思い出がよみがえつてくる。中村は自分の欠点を知つてい
た。それができないことでもがき、苦しんでもそこから逃げなかつ
た。僕にメールを送りアドバイスを求めることで自分の欠点に立ち
向かつていつたのだ。

僕も面倒くさがらずにその都度アドバイスをした。それは友達と
いうこともあるが、僕自身も同じような経験があつたからだ。そう。
恋愛の師匠と呼べる人に僕も中村と同じようなことをした。だから
決して他人とは思えなかつたのだ。

それにしても女性が苦手だったあの中村がいよいよ結婚か……。
人は成長するものだと感慨深かつた。

成長は決して一人でできるものではない。成長の陰には必ず自分を押し上げてくれる人の存在がある。僕が真紗子と結婚したのもひとえに師匠のおかげだ。

「あれ……？」

僕の一言つてもしかして真紗子との結婚に関係あるのか？何だけ？

中村から返信はまだこない。「僕の一言」が頭から離れなくなり、次のフォルダに答えを求めた。ここには中村以外にもたくさんメールが入っていた。ご丁寧に「有明だよ」というメールまで残っている。メールアドレスを見ても、その内容もまったく記憶にない。

このメールをなぜ削除しなかったのかまったくの謎だ。他にも中村とは関係のない、そうした類のメールが多くなった。件数も多いし、別のフォルダを開こうとしたそのときだつた。

「おはよう」

目が釘付けになつた。そんなはずはない。彼女からのメールはすべて削除したはずだ。

「あつー」

なんと、保護されていた。しかもこのメールだけ別のフォルダに振り分けられていたので、削除したつもりができていなかつた。日

付は？「十一月二十九日」。間違いない、彼女から最後のメールが届いた日だ。

「思い出したぞ、僕が中村に言つた一言を

思わず叫んだ。叫ばずにはいられなかつた。中村だけではない。僕が真紗子と結婚できたのも、そしてあの失恋を乗り越えられたのも、すべて彼女が教えてくれた「一言」のおかげだった。

大失恋④ おはよう！」（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋⑤ 別れた理由が知りたくて

「今夜から明日朝にかけて厳しい冷え込みになりそうです」

テレビから流れる天気予報にも上の空だった。

一応、留守電にはメッセージを入れておいたけど、電話がかかってくることはないだろう。あの日を最後に洋子は電話に出てくれない。一体どうしてこうなってしまったのか。

僕が悪いのはわかっている。「別れましょ」と言われてもそれを受け入れられず、「電話しないで」と言われても電話してしまう。どうしてこうなったのか、その理由がわからないかぎり自分を止めることができなかつた。なぜここまで嫌われなければいけないのか。好きという気持ちも消えてしまうものなのか。

友達にも相談した。彼らの答えは皆同じだった。

「あきらめたほうがいい」

でも、誰に何を言われようが洋子は戻つてくれると信じていた。なぜなら僕たちは「運命の人」だから。

運命の人とはいいくつもの偶然が重なり合う人のこと。そうでなければこのすれ違う世の中でどうして男女が出会い、恋をすることができるだろう。たとえば僕たちにはこんな偶然があった。メール送信と同時に電話がかかってきたのである。メールを送った側はこのときどう思つだろ？

僕は洋子の声が聴きたくて家の電話から電話したことがあった。
そしたら洋子は不思議そうに聞いてくる。

「もうメール届いたの？」

僕はメールが苦手で、その返事を電話で応えることが習慣になつていたために洋子はそう聞いたのだろう。しかしメールは届いておらず、洋子がこのとき何を言つてているのかわからなかつたので聞いてみた。

「そのメールに何て書いたの？」。

洋子がメールの内容を話し出そうとしたそのときだつた。机の上に置いてある携帯電話が鳴り出して、画面を見てみると「新着メール」と表示されていた。

「もしかして、今届いたこのメールのことを見つけるの？」

そう尋ねると、受話器越しに洋子の異変が伝わってきた。

「ねえ、聞いてる？」
「大好き」
「いや、そういう訳なくて……」
「大好き」
「だから、違うって……」
「大好き」
「じゃあ、ゴキブリも？」
「それは嫌い、でも大好き」

「この偶然がよほどうれしかったのだろう。僕のいじわるを除いて、洋子は何を聞いても「大好き」としか言わなかつた。何度も何度も、心に溢れる感情をすくい出し、それをそのまま僕に届けてくれたのだ。

洋子が僕の誕生日を祝つてくれたときもそつだつた。それまでの楽しい会話から一転、洋子は突然黙り込み、うつむいてしまつた。

「どうしたのだろう?」

僕は事態の状況を飲み込めなかつた。何か失礼なことを言つてしまつたのだろうか。しかし、そうでないことは洋子の次の一言ですぐにわかつた。黙り込んだのなく、それを言おうかどうしようかためらつていたのだ。

「実は、前の彼と別れた日が今日なの」

洋子が自分から過去の男の話をしたのは初めてだつた。この日のために用意した、洋子なりのサプライズなかもしれない。

別れは出会いの始まりだと言つ。たしかに第三者的にはそうかもしないが、当事者にとつてその実感を得るのはもう少し先である。別れた悲しみを乗り越えて、その出会いに気づくまでにはどうしたつて時間がかかる。しかし、それが具体的な形となつて表れたとしたらどうか。たとえば前の彼と別れた日が、次に好きになつた人の誕生日だとしたら? これ以上の「別れは出会いの始まり」を表すものが他にあるだろうか。

大失恋⑤ 別れた理由が知りたくて（後書き）

いつも感想をありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。

これからも温かい目で見守ってください。

大失恋⑥ 洋子との馴れ初め

洋子は僕と出会つ前、悲しみのどん底でもがいていた。見るに見かねた友人の美穂子が励ましてあげてほしいと紹介したのが僕たちの馴れ初めだつた。

その晩、洋子が電話をするからよろしくねと美穂子は言つた。悲しんでいる女性を励ますことなどまるで自信がなかつたが、引き受けてしまつたからには後には引けない。僕を紹介した美穂子の面子だつてある。

洋子から電話がかかつてくるまでにやるべきことはしておきたかった。とりえあえず思いついたことといえば本屋へ行つて「元気になる言葉」関連の本を見繕つて、夜の電話に備えることだつた。

「明けない夜はない」

「止まない雨はない」

「夜明け前が一番暗い」

ページを開く度に「元気になる言葉」が表れる。世の中には人を励ますたくさんの言葉があるのだと思つた。

当時の僕は新入社員で、若葉マークの駆け出しもいいところだつた。仕事を覚えるだけで精一杯で、慣れない生活が続きどこか疲れていたのかもしれない。洋子を励ますつもりで用意した「元気になる言葉」に僕自身が励まされ、少し元気になつたような気がした。

いつの間にか本の世界へと引き込まれてしまつた僕に、携帯の着信音が本来の目的を思い出させてくれた。ついにそのときがやつて

きたのだ。僕はひとつ深呼吸をして、携帯を取り上げた。

「もしもし」

「元気になる言葉」をいつでも取り出せるよに、何なら僕がついついアンダーラインを引くくらい共感した言葉を紹介しようと横に置いて励ます気満々でいたのだが、結局本の出番はなかつた。

お互いの自己紹介から始まって、共通の友人である美穂子のことや世間話に終始して、気がつけば三時間以上話をしていた。

普通に楽しかつた。電話がかかってくるまでの不安を思い返せば笑わずににはいられない。取り越し苦労とはこのことを言うのだろう。つい先日、上司に言われたことを思い出した。

「仕事は段取りでほとんど決まる」

仕事に取り掛かる前は、あらゆることを想定して準備を怠るなど徹底的に仕込まれた。当時はその意味がわからず無駄な作業が多いのを非効率的に思っていたが、実際にそれでうまくいくことは多かつたし、今回もうまくいった。

要するに始まる前は不安が付きまとつてネガティブ思考になりがちだけど、準備をして頭や体を動かすことで一つずつ不安を消していく。流した汗は自信に替わり、望む結果が生まれやすくなる。上司はそう言いたかったのだろう。

最初の電話で話が合つた僕たちは次の日も、また次の日も電話で話をした。不思議なことだが、

「今日何してたの？」

たつたそれだけで一時間以上も会話が続いた。こんな人初めてだつた。洋子もそう思ったのだろう。話を続けていくうちに笑いがひとつ、またひとつ増えていった。洋子とは電話だけでなく、メールやデートを通して関係が深まつていった。

大失恋⑥ 洋子との馴れ初め（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋⑦ こんな偶然つてあるのかな

ある日のこと。一緒にご飯を食べる約束をしていたが、僕の仕事が早く終わり洋子を駅の改札まで迎えに行つたことがあつた。ちょうどラッシュと重なつて改札付近はとても混雑していた。これでは洋子を見つけるれないと思い、僕は改札近くのコンビニにいることをメールで告げた。

しかし約束の時間を五分、十分と過ぎても洋子は現れない。時間に厳しい洋子には珍しいことだつた。事故にでもあつたのか？一抹の不安が頭をよぎる。十五分を過ぎても現れなかつたので心配になり電話をした。呼び出し音が鳴つたとほぼ同時に洋子は電話に出た。

「もしもし、今どー?」

洋子から意外な答えが返つてきた。

「あなたの隣よ」

携帯電話を持ちながら左右を確認した。何と僕の左隣に微笑んでいる洋子が立つていいではないか。

話を聞くと約束の時間より少し早く到着したようだ。洋子は僕にすぐ気づいたが、僕がなかなか気づかないことに腹を立て、僕の目の前を何往復もしたそうだがそれでも僕は気づかなかつたそうだ。でも自分を探している真剣な表情がうれしくて、その姿を横で見ていたといつ。

着いたら声をかけてくれればいいのに……。でも、僕の鈍さ

が招いたことだから言つに言えなかつた。

「あれつ？」

僕の声に反応した洋子はバックに携帯電話をしまいながら尋ねた。

「なあに？」

「それ見せて」

「それって？」

「携帯」

僕の携帯電話の色は淡いブルー。洋子も同系統の色を持っていることは前から知っていたが、色があまりにも似すぎていたのでこの機会に一つの携帯電話を並べて確かめてみようと思つた。

「うわっ！」

ほぼ同時に一人は声を上げた。そうなつてほしいと願つたことはあつたが、まさか本当に実現するとは・・・。僕たちの携帯電話は同じ機種だったのである。しかも色まで同じ。

それが最近発売された機種ならまだわかる。しかしそうではなくて、かれこれ一年近く前のものである。その間どれだけの機種が各メーカーから発売されただろう。そう思つと運命的なものを感じずにはいられなかつた。

「すごいね」

「うん、す『』い」

「まさか同じ携帯だつたなんて・・・」

「そもそもうだけど、これを見て」

二人が同じ機種で色まで同じ。これ以上に驚くことが他にあるのか。洋子はそれを手にとつて見せた。

「このストラップ」

「うわっ！」

僕は今日三度田の声を上げた。一台並んだ同じ携帯電話の先についているストラップはこれまた同じ「天使の翼」だった。

「どうしたの、これ？」

「うん。これを付けていると、好きな人に想いを届けてくれるんだって」

ここまでくると驚きを通り越して笑えてくる。理由まで同じだつた。本来ストラップをつけないこの僕が、天使の翼だけは付けている。口下手な僕が好きな人に想いを伝える方法はただ一つ、道具に頼ることだった。周りから成功体験は聞いていたし、これを付けていれば想いは届くんだと自信を持つて気持ちを伝えることができる、いわばお守りのようなもの。なかなかその機会は巡ってこなかつたが、いつか巡ってきたら十分に活躍してもらおう。出会いなどいつも訪れるかわからない。チャンスを逃すくらいなら、頼れるものには何でも頼ろうと思つて付けていた。

その晩の僕たちはこの二つの偶然に興奮していた。食事をしながらずつとこの会話で盛り上がった。

「この台詞が何度出てきたかわからない。僕だけでなく洋子もきっ

と運命的なものを感じたに違いない。天使の翼はこのとき僕たちの想いを届けてくれたのだ。

大失恋⑦ こんな偶然つてあるのかな（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながります。
これからも温かく見守ってください。

大失恋⑧ 運命の人なら別れないはずだろ？

洋子との思い出が次々とよみがえってくる。僕たちはお互いを運命の人と思うほど強烈に結びついていたはずだった。

メールと電話が同時だったとき。前の彼と別れた日が僕の誕生日と同じだったとき。そして同じ携帯電話とストラップ。

これほどの偶然が重なり合いながら、今では電話に出てくれない。

あの「偶然」に出会ったときの目の輝きは何だったんだ。運命の人なら別れないはずだろう。一度離れてもやり直せるのが運命の人ではないのか。なぜなんだ、なぜなんだ、洋子。僕たちには笑い合つた日々がある。ケンカだって何度もした。しかし、その度に仲直りをして二人の絆は強くなつていつただろう。

今回だつてケンカみたいなもののはず。付き合つている一人にすれ違いはよくあることだ。ならばこれまでどおり仲直りできるはずじゃないか。どうして今回は違うんだよ。いつものように怒つて泣いて、また一人で話し合えばいいじゃないか。なぜそれさえも拒絶するんだ、洋子、洋子、洋子……。

うつむいているそばで携帯電話のストラップが目に入った。洋子も付けている、あの天使の翼だ。僕は携帯電話とともにそれを手に取り握り締めた。

この二つは洋子と同じものなのに、これを見たときの僕たちの気持ちも同じだったはずなのに、今はもう心が通わない。

形あるものは残り、それ以外は消えていく運命なのか。僕たちが付き合った時間、そのすべては幻だったのか。僕が洋子を好きだったという気持ちも洋子がそうであるようにいつか消えていつてしまうものなのか。

忘れたくはない、この気持ち。でもどうすればいいだろう。どうすればあの日の一人に戻れるだろう。考えれば考えるほどこのことしか思い浮かばなかった。僕の想いはもう届かない。

「チクつ

強く握り締めていたせいかストラップの天使の翼が僕の手を刺した。

「お前まで僕を裏切るのか？」

天使の翼に向かつて僕は言った。

「お前は想いを届けてくれるのだろう？それがお前の役割だろう？ならば僕の想いも届けておくれよ。洋子にこの気持ち、届けておくれよ。お願いだよ、お願いだよ・・・」

両手でそれを握り締め、何度も何度も祈るように言った。

どれくらいそうしていただろうか。両手の中から携帯電話のけたましい着信音が鳴り響き、それは雷鳴のように僕の耳に轟いた。

大失恋08 運命の人なら別れないはずだろう（後書き）

いつも感想をありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。

これからも温かく見守ってください。

大失恋⑨ 一人で決めた仲直りの方法

画面を見てみると「非通知」と表示されている。誰だろう、こんな時間に。時刻は深夜二時を過ぎようとしていた。

ま、まさか・・・・、洋子? ようやく僕の想いは届いたか? そう期待してしまっては、この時間に電話をかけてくるのは洋子以外考えられなかつたからだ。

ケンカしたときはいつもそうだつた。メールは「件名なし」で送ってきたし、電話も深夜が多かつた。

僕たちはケンカをした当日に仲直りをしようと話し合つたことがあつた。二人とも些細なござが原因でケンカ別れになつてしまつた過去があり、もう大切な人を失いたくない。だったらどちらが悪くてもケンカをした当日に仲直りをしよう。たとえ相手を許せないほど憎んだとしても、話し合えばなんとかなるんじやないか。ならなかつたとしても話し合うという過程が大事。そこから生まれたものを仲直りのきっかけにして大事にしていこう。これまでそうやつて仲直りをしてきた。

非通知と表示された携帯はそれからも鳴り続けた。しかし、今は誰とも話したくなつた。たとえ洋子だとしても。

どうしてこのようなことになつたのか、どうすれば洋子とやり直すことができ、もう一度あの笑顔を取り戻せるのか、一人でじつくり考えたかった。こうなつたすべての原因は僕にある。しかしこれまでは話し合い、謝ることで許しを得てきた。

では、今回なぜそれが通用しないのだ？あれほど好きだと言つていた洋子が電話に出ない理由とは何か。わからない。その間も携帯電話は鳴り続ける。

もし本当に洋子ならその理由をすべて聞いてやる。間違い電話ならそれでいい。僕は通話ボタンを押し、電話に出てみることにした。

「もしもし」

「自分、やばいで」

な、なんだ？一瞬、自分の耳を疑つた。携帯電話から聞こえてきたのは関西弁の女の子だった。もう一度聞いてみる。

「もしもし」

「」のままやつたら自分、どんどんダメになつてくで

やつぱり関西弁だ。しかも聞いたことのない女の子の声。僕の知り合いに関西弁を話す女の子はない。やつぱり間違い電話だつたか。洋子からの電話だと期待した自分が少し恥ずかしかつた。そんなはずあるわけないのに。僕は改めて聞いてみた。

「あの・・・どちら様ですか？」

「洋子の」とや

大失恋09 一人で決めた仲直りの方法（後書き）

いつも感想いただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。

これからも温かい目で見守ってください。

大失恋10 失恋したら取らうとする行動

彼女ははつきりと「洋子」と口にした。なぜ洋子のことを知っているんだ?ただの偶然か、あるいは洋子が僕をあきらめさせるために友達に頼んだのか?いづれにしても突っ込んで聞いてみる必要はある。

「洋子のことって何ですか?」

「とぼけんなや。今も電話しようとしてたやん?」

いや・・・、それは違う。元に戻りますよ!ことお祈りはしていたけど、さすがにそれは言えなかつた。

それにしてもなぜ彼女は電話すると思つたのだろう。洋子に止めさせてほしいとでも頼まれたからか。

「洋子のこと、知つてるんですか?」

「洋子のことだけやない。自分のこともよつ知つとるで」

僕のことも知つてるだつて?

「僕の何を知つてるというんですか?」

だんだん腹が立つてきた。深夜遅くに非通知で電話してきて僕のことを知つてるだつて?冗談じやない。洋子だつて僕のすべてを知つてゐるわけではないのにその友達にわかつてたまるものか。

「生年月日などはもちろんのこと、これから自分が洋子に取らうとしている行動とか。いろいろわかつとるで

洋子は自分でも言っていたが、僕とそれ以外の人とでは接し方が違つらしい。つまり、僕と一緒にいるとき以外の洋子のことを僕は知らない。なぜ彼女が僕の生年月日を知っているのか。どのような会話で洋子はそれを話したのか。「彼は何歳?」と聞くことはあっても、生年月日を聞く人は少ないだろう。

そして気になつたのは「僕がこれから洋子に取ろうとしている行動」についてだ。たしかに今は電話しなくとも、明日以降家の電話から電話してしまう可能性は十分ある。というかしてしまうだろう。その他に彼女は何をわかっているのか。内心、ドキドキしながら聞いてみた。

「これから僕が取ろうとしている行動って何ですか?」

「自分、今悩んどるやろ?なぜあんなに好きだと言つてた洋子が電話に出てくれへんのかつて。自分が初めて家の電話を引いたとき、洋子はめっちゃ喜んどつたもんな」

えつ?そんなことまで知つてるの?どうやら「いろいろわかつている」という彼女の言葉は嘘ではなさそうだ。そう、あれは僕が一人暮らしを始めたときだった。

大失恋10　失恋したら取らつとする行動（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋11 星の王子様へのお願い

当時、洋子との連絡手段は携帯電話だけだった。僕は一人暮らしの寂しさもあって毎晩洋子に電話をした。その日の出来事、思ついたことなどどんな些細なことでも僕の思つてていることを洋子に伝えたかった。洋子の声が聞きたかった。

しかし、現実とは甘さと厳しさを兼ね備えるものである。翌月の携帯電話の請求書を見て我が目を疑つた。そこには前月の何倍もの請求額が記載されていた。そしてほとんど条件反射で洋子へ電話をする。こいつらをしているから電話料金がかさむのに。

洋子は固定電話を引くことを提案してくれた。自分もそうしているのだと言つ。しかし手続き等の面倒もあってなかなか決断できなかつた。

次の日も、そして次の日も携帯電話から洋子へ電話した。このとき僕はあきらめていたんだと思つ。他の出費を削つても洋子と話がしたかった。

洋子は電話するたびに聞いてきた。

「固定電話引いてみれば?そのほうが絶対お得だよ

なかなかそうしない僕に洋子は電話だけでなく、メールでもアップロードを試みた。

「星の王子様へお願いがあります。私の大好きな人が固定電話を引いてくれますように」

ここまで言われるとさすがに引かなきやまざことこの気持ちになつてくる。洋子の顔を立てるために僕は固定電話を引くことに決めた。それを伝えたときの洋子の声は今でも忘れない。

「ほんとこ? ほんとこ? やつたーー。」

洋子は僕だとわかると声が上ずる。このときの「やつたー！」はさらにその上を行き、毎日電話している僕でさえ初めて聞いた声だつた。このときまた一つ、洋子の知らない部分を知ることができ、洋子と同じへりつけしかったことを覚えていく。

大失恋1-1 星の王子様へのお願い（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋1-2 絶対言つてはならない恋愛の禁句

彼女は僕がこれから取るであろう行動について話してくれた。

「失恋した者が連絡を絶たれた後に取る行動は次の三つに分けられる。一つは自分を責めて殻に閉じこもってしまうこと。もう一つはそれ以外の連絡手段を探して復縁を迫ること。そして最後は寂しさを埋めるために新しい恋人を探すこと。自分と洋子は強く結びついでおつたからウチはこの二つだけつかと踏んだんやが、ジヤ？ 当たつとるやろ？」

洋子と仲直りがしたい。これまでのことを反省し、これからは一度とその手を離さないよう大事にしていきたい。それを伝えることで、その手段を探すこと今頭がいっぱいだ。彼女の言つとおり「二つ目」という指摘は当たつている。

しかし、僕の取ろうとしている行動がわかつたところでどうにもならない。知りたいのは、どうしてここまで洋子は僕を嫌いになつたのか。その理由を友達の彼女なら知つているかもしない。仮に知らなくても、同じ女性としての意見を聞いてみたかった。

「どうして洋子は電話に出てくれなくなつてしまつほど僕を嫌いになつてしまつたのでしょうか？」

「それは自分が、絶対言つたらアカン恋愛の禁句を言つたからや

絶対言つてはならない恋愛の禁句だつて？そんなものがあるのか？しかもそれを僕が口にしたつて？

「自分、洋子に別れよいつと書いたやろ、それは書いたら絶対アカン
ねんで」

大失恋1-2 絶対言つてはならない恋愛の禁句（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋1-3 洋子との別れ

たしかに別れようと僕は言った。そのころはお互の時間が合わず、月一回会えればいい方だった。遠距離恋愛じゃあるまいし、これまで付き合っていると言えるのか。そう言つと洋子は怒氣を強めて言い返した。

「だつたら時間を作る努力をもつとしてよ」

この言葉の裏には「あたしはその努力をしてるわよ」という意味が込められていた。あれはデートの前日に電話したときのこと、洋子は風邪を引いていて、会話の最中に何度も咳き込み苦しそうだった。「大丈夫?」、僕がそう聞くと洋子は心配かけまいと「大丈夫」と答え、「明日のデートは延期する?」と聞けばやつぱり「大丈夫」と答えた。そして当日、洋子に会うと髪が少し濡れていた。風邪を引いているのに朝からシャワーを浴びたのだろう。まったくなんてヤツだ。

洋子が怒るのも無理はない。洋子は努力をしているのに、僕は不満ばかり。悪いのは僕だった。しかし寂しさ故のいろいろが冷靜な判断を失わせ、売り言葉に買い言葉でついその言葉を口にしてしまつた。

「もう、いいよ。別れよう。洋子と話してもケンカばかり。全然楽しくないよ」

洋子の顔から血の気が引くのが受話器越しからでもわかつた。さつきまでの怒りに満ちた声は懇願する声へと変わり、思い止まるよう願い出た。

「まだ早いよ。私たち、これからじやない」

それから何度も慰留されたが、「別れよ」の言葉が口から出た瞬間、僕の脳は最後まで別れ以外の言葉を拒絶した。受話器からは洋子のすすり泣く声だけが深夜の静寂に響き渡った。

永遠に続くと思った恋愛も、幕切れは呆気なく訪れた。この日で僕たちは終わつたはずだった。しかし僕は洋子を思い出してしまつたんだ。

大失恋1-3 洋子との別れ（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋14 別れて初めての電話

仕事から帰りいつものようにシャワーを浴びて、髪を乾かそうと引き出しからドライヤーを出したときだつた。奥から「ロロロ」と何やら光るもののが転がってきた。拾い上げるとそれは洋子が使っていた香水の小瓶だつた。何でこんなところに……。

照明に反射したそれはまばゆい光を放つていた。キラキラと輝く洋子の香水。まるで僕たちの思い出を照らしているようだつた。強い郷愁に誘われて思わず宙に振りかけた瞬間、当たり一面に洋子の匂いが広がつた。胸が急速に縮こまつた。これまで閉じ込めてあつた洋子との思い出が一気に飛び出した。

洋子の声が聞きたい。久しぶりに洋子を想つた。でも僕たちは別れた身。電話をすることは許されない。でも……。

僕は賭けに出てみようと思つた。番号表示で五コールまで。それで出なければもうしない。香水も処分して、洋子のことも忘れよう。出てほしいうな、出てほしくないような複雑な気持ちが心をかき乱す。一コール目、二コール目、三コール目。僕は心中で叫んだ。「頼む、出てくれ」。

「もしもし」

久しぶりに聞いた洋子の声はどこか寝ぼけ声だつた。付き合つていたころは平氣で起きてた時間でも、僕と別れて生活習慣が変わつたのだろう。

「お久しぶりです」

その後に続く言葉が出てこなかつた。自分から振つておいてどの面下げて電話したのか。僕には負い目があり、それが次の言葉を遮つていた。

それでも一言、二言話していると、洋子の声が一瞬高くなつた。

「あつ・・・・・」

僕の直感は正しかつた。洋子はそのとき寝ていて、枕元で鳴つた携帯が着信でなくアラームだと思つたらし。決して僕だとわかつて電話に出たわけではなかつた。

それから世間話で一時間以上話をした。少しぎこちなさは残つたが久しぶりに洋子の声に触れた。話せて楽しかつた。電話をしてよかつた。洋子はあれから部署が異動になり、新しい仕事を覚えるのに忙しく毎日を過ごしていいるといつ。「大変だね」。僕は洋子を労わつた。明日早いからというので電話を切つた。その途端、涙が止まらなくなつた。僕は気がついたんだ。今でも洋子が好きだということを。そして犯してしまつた過ちに。

次の日も声が聞きたくて電話をした。僕の気持ちは昨日の電話で付き合つていた当時にすっかり戻つてしまつていた。しかし洋子はといえば最初は電話に出てくれたものの、だんだんと留守電が多くなつた。仕事が忙しいのだろう。付き合つていたころはそれでも必ず掛けなおしてくれたものだがそれもなく、そしていつも僕が電話をしていた。不安になつて洋子に聞いてみた。

「いつも電話するの僕なんだけど、洋子からは何か話したいこと

つてないの？」

そのとき時間は止まつた。

「もう電話しないでほしいの」

「えつ・・・・・」

メールもなければ電話もない。薄々は気づいていた。僕は避けられているのではないかって。それは思い過ごしだと自分に言い聞かせて何とかここまでやってきたが、さらに決定的な言葉は続いていく。

「別れたんだし、私仕事が忙しいし、あなたと話すことほんとう何もないの」

電話をすれば声を上ずらせてまで喜んだ人が、もう電話しないでと言つ。僕の中で洋子はあのころのまま何も変わっていない。これは夢なのか。僕の過ちに対するちょっとつきつめのいたずらなのか。もう十分反省している。頼むから嘘だと言つてくれ。悪い夢なら早く覚めてくれ。

大失恋14 別れて初めての電話（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋15 恋愛の行き着くところ

これが洋子との最後の会話だった。悪い夢だと思っていたものは、現実だった。

「自分に別れようと言われて洋子は毎晩泣いとつたんやで。『ご飯も食べられず何も考えられずに無氣力になつてもうて、見るに見かねた友達が交代で洋子に添い寝までしてたんやで。それを今さらやり直したいって自分、勝手すぎるやろ」

言葉が出なかつた。僕と別れてそこまで苦しみ、悲しんでいたのか。僕は僕と一緒にいる以外の洋子のことを何も知らない。美穂子の紹介で初めて電話したときも、僕に心配をかけまいと気丈に振舞つていたのは何となくわかつたが、一人になるどこまで弱くなってしまうなんて。

自分でも勝手すぎるというのはわかつてゐる。一度別れたのにもう一度やり直そうなんて虫が良すぎる。それが片思いだつたら僕はあきらめていただろう。しかし僕たちは付き合い、お互いを運命の人と思うまで強く結びついたのだ。運命の人ならやり直すことだつてできるのではないか。僕はもう一度洋子とやり直したいんだ。

「恋愛はな、結婚するか別れるか。行き着くところはそのどちらかしかあらへん。たとえそれが運命の人やつたとしても、別れたら終いなんや。同じ人との恋愛は一度だけやから輝くんやで」

僕たちは結婚する前に別れた。同じ人との恋愛は一度切りで別れたらそれでお終い。でも、それって寂しくないですか？だつたら運命の人つて何だろう？

「別れたらお終いって、それは運命の人でもどうにもならないもんですか？それでは何のための運命の人なんですか？運命の人って何ですか？」

僕は「運命の人」について立て続けに質問した。彼女がそこまで言うのならきっとその意味を知っているのだろう。それでもやはりどうにもならないものなのか。

「運命の人ってな、ただの言葉やねん。誕生日が同じやつたり、趣味が合つたり、自分たちのように携帯やストラップが同じやつたり、そうした偶然を人は運命と思いよる。それはきっかけにはなるかもしけんけど、そこから先は一人が努力して関係を築いていくものなんや。恋愛ってな、努力を止めると終わってしまうものなんや」

大失恋15 恋愛の行き着くところ（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋16 失恋を乗り越える方法

彼女の言つとおり、僕たちが強く結びついたのは偶然がきっかけだった。こんな偶然あるわけがない。それが三つも四つも続けばどうしたつて二人は特別な関係だと思うだろう。しかし彼女に言わせれば、それはきっとかけであつて運命の人とはただの言葉であるとう。

そしてもう一つ、彼女は大事なことを教えてくれた。努力を止めると恋愛は終わってしまうというこの言葉、僕たちの恋愛が終わってしまったのはその努力を怠つたからだつた。初めは毎日していた電話も、一日に一度になり、三日で一度になり次第に洋子から掛かってくる電話のほうが多くなつていつた。洋子に興味がなくなつたわけではない。嫌いになつたわけでももちろんない。ただ、何と言ふか、心の中の何もなかつた空間に「洋子」という新しい場所ができたことに安心したのかもしれない。電話をすればいつでも出でてくれるし、折り返してもくれる。

一度安心感を得ると、洋子に夢中だつた時間が次第に自分の時間へと関心が向かつていつた。これまで途中で切り上げていた仕事にも期限はある。いつかは終わらせなければいけない。それに趣味や自分の可能性を広げてくれる新しいことにだつて挑戦していきたい。そうそう恋愛にばかり時間を割けないと思つたことが気がつけば二人の関係に溝ができる、そしてケンカが多くなつていつた。

「自分が別れようと言つたんやで。洋子と恋愛をする努力を投げ出したんやで。そないなヤツにどうして洋子がもう一度惚れ直すと思つ?」「

携帯を持つのがやつとだつた。それくらい全身から力が抜けていつた。何の反論もできない。どうやら認めなければいけないようだ。僕たちは終わつたということを。

運命の人ならもう一度やり直せる。今まで信じていたものが、唯一の希望がこれで完全に消えた。僕の目の前には絶望という名の闇しかなかつた。何も見えないし、見ようという気力すらない。受話器から聞こえてくる彼女の声に反応するのが精一杯だつた。

「自分、失恋を乗り越える方法つて知つとる?」

大失恋16 失恋を乗り越える方法（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋17 失恋を乗り越える第一段階とは

失恋を乗り越える方法？失恋したのは初めてではないし、これまでだつて乗り越えてはきたと思う。でも今はそれを考える気力なんてない。

「失恋を乗り越える第一段階は別れを受け入れることや。しかしこれがなかなかできひん。さつきまでの自分のように謝ればやり直せるんじゃないかとみんな期待を持つてしまつんや。だから苦しいし、いつまでも前に進まれへんから苦しみも続いていく。自分は今ここにある。そして第一段階クリアや。よく受け入れたな。えらいで」

えらいで、か・・・・。僕は褒められたのか、洋子の友達の彼女に。

「失恋したときって、目の前が真っ暗になるやろ？」

これまで無氣力だつた体がこのとき初めて反応した。

「はい、今の僕がそうです」

「それは、洋子という太陽が西の空へ沈んでしまつたからなんや」

うまいこと言つたと思った。今までは洋子とやり直せると思つていたから視界を保てたけど、それがなくなり目の前は真っ暗になつた。彼女は洋子を太陽に例えて真っ暗になつた原因を僕に説明してくれた。何てわかりやすい説明なんだ。

「でもな・・・」、彼女は続けた。

「明けない夜はないんやで」

「あつ！」

この言葉は最初の電話で洋子を励まそうと用意したものだ。それが今度は僕が励まされることになるなんて。これまでの流れを見ればまさか隣に本があり、僕のような付け焼刃ではないだろう。きっと彼女自身がこれまで何度も失恋を乗り越えてきた経験から出た言葉だと思う。

「あれつ？」

ふと疑問に思つた。どうして彼女はここまで僕を思つてくれるのか。洋子をあきらめさせるのならもう十分のはず。「失恋を乗り越える方法」なんてわざわざ教えてくれなくともいいはずだ。本当に彼女は洋子の友達なのか。彼女は一体誰なんだ。

「ほんならぼちぼちいこか？ テン式失恋を乗り越える方法を」「テン式？」

テン式って何だ？ 僕は思わず口にした。

「あつ！自己紹介まだやつたな。ウチな、実は天使やねん。信じられんかもしけれへんけどほんまの話。天使のテン。よろしく頼むで」

今までの言葉がこの一言ですべて胡散臭く思ってきた。天使って・・・なぜ天使がわざわざ携帯電話を使って電話する？ 神々しい光を放つて空から舞い降りてくるものだらう。しかも関西弁だし。天国ではみんな関西弁なのか？

もし元気だつたら延々と突っ込んでいただろうが、失恋直後で明日さえ見えない僕に当然ながらその気力はない。この際天使だろうが何だっていい。僕にとって大事なのはこの闇を抜けることだった。

「よろしくお願ひします」

僕はテンに教えを請うことを選んだ。

「ほんなら仕切り直しや。いくで。テン式失恋を乗り越える方法を」

こうして自称天使のテンとの不思議な関係が始まった。

大失恋17 失恋を乗り越える第一段階とは（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋18 失恋すると周りが見えなくなるのは

「まず初めに、聞きたいねんけど」

「よいよテソの講義が始まる。緊張のせいか受話器を持つ左手が震えた。

「自分、『ごみ箱満杯なんとかやうづ?』

「は?」

思わず声に出でてしまった。

「『ごみ箱だけやなく、灰皿も満杯なんとかやうづ?』

一体何を言つているんだ。失恋を乗り越える方法というから愛だの喪失感だの、そうした思想的なところから入ると思っていたが、いきなりごみ箱や灰皿ときた。今後の展開がまるで予想できない。本当に失恋を乗り越える方法までたどり着くのだろうか。僕はわらにもすがる気持ちで教えを請おうとしているのに。そつ思つとだんだん腹が立ってきた。

「『ごみ箱や灰皿が満杯なのと失恋を乗り越える方法、どんな関係があるんですか?』

僕の切迫した気持ちなどおかまいなしに予想外の展開はさらに続いた。

「アリもアリも大アリ喰いやで」

ふ、ふざけてる。」いつ、絶対ふざけてる。やつきの呪詛の数々は一体何だったんだ。太陽の件なんて感動さえしたのに。

「まあ、そない怒らんと最後まで聞いてや。今の自分には欠けてるものがあんねん。何やと思ひ？」

僕に欠けているもの？少し考えて頭に浮かんだものをそのまま答えた。

「ありのままの現実を見る、」とでしようか？

「アハハ。おもういな、自分」

僕の答えを聞いてテンは笑った。何が面白いんだよ。真剣に答えて損した。

「ちやう、ちやう。それもあんねんけど、ウチが言いたいのは失恋すると周りが見えなくなるということなんや」

さつき言っていた、失恋すると目の前が真っ暗になるといつもの「どうやら関係がありそうだ。」には黙つて話の続きを聞いてみよう。

「真っ暗になつて闇に包まれるのは何も未来だけやない。失恋は現在も、そして自分の周りさえ見えなくさせてしまうんや」

大失恋18　失恋すると周りが見えなくなるのは（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋19 人が変わらうと思つても変われないその理由

なるほど。それでごみ箱と灰皿か。僕は部屋を見回してみた。テ
ンの言ひとおりごみ箱と灰皿は今にもこぼれ落ちそうなほど溢れて
いる。

それだけではなかつた。脱いだ服は部屋中に散乱しており、布団
は敷きっぱなし。いつ干したのかさえ記憶になかつた。もはや見る
までもなかつたが、確認のために台所へ移動してみた。やっぱり！
いや、それ以上の光景が目の前にあつた。シンクは洗い物で溢れ、
その横には空のカツプ麺やコンビニ弁当が所狭しと山積みされてい
る。これほどまで生活が荒んでいたとは今の今まで気づかなかつた。

「人はな、変わろうと思つたつてなかなか変わられへん。それは
どう変わればいいか、何をすれば変われるのかわからんからや。で
も、それが目に見えるものやつたらとしたら変われる思わへん？」

僕は失恋を乗り越えたいと思つている。こんなにもみじめで、辛
い思いをするなんてもううんざりだ。ではどうすればいいのか、そ
の方法がまったくわからないのでこうして見ず知らずの女性に教え
を請おうとしている。

冷静に考えればおかしな話だ。こんな僕を見て人は情けないと思
うかもしない。

「お前、恥ずかしくないのか？」

そんな声が聞こえてきそうだ。

僕も第三者なら同じ台詞を言つかもしない。でも、人が見て恥ずかしいことをするのが恋愛だろう。面と向かつて好きだ嫌いだと言つてみたり、外では人目をばからず堂々と手を絡め合つたりしているだろう。

失恋して情けない？恋愛すれば上がったり下がったり、気持ちは一喜一憂するものだ。安定した気持ちのどこにときめきがあるのか。

この際人の目なんてどうでもよかつた。この失恋を乗り越えるためならどんなことでも、恥ずかしいことできえやつてやる。笑いたいヤツは笑えればいい。僕は今、必死なんだ。

大失恋19 人が変わらうと思つても変われないその理由（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋20 失恋すると忘れてしまうもの

ふと、笑いが込み上げてきた。僕自身が発した「笑う」という言葉に誰よりも先に僕が反応した。必死な自分が客観的に見えたとき、おかしくてたまらなくなつた。

これまで洋子のことを一人で考え、悩んできた。でも今はテンがいる。テンが心配して、話を聞いてくれる。僕の想いをテンに話すことでも、もっと客観的に見ることができたのかもしれない。

どんな事情があるのかわからないが、テンは失恋を乗り越える方法を僕に教えようとしてくれている。この際、テンが洋子の友達か誰なのかなんてどうでもよくなつた。

僕はテンの教えに従つてこの失恋を乗り越えてみせる。それでいい。そう思つと真つ暗な闇にひとつ星が見えたような気がした。

「何がおかしいんや？」

僕の笑いをテンは聞き逃さなかつた。本当のことを語るのはあまりにも照れくさかつたので、その理由をこれまでの会話から探してみた。

「やつきの『アリもアリも大アリ喰いや』を思い出しまして、今いじのおかしくなつてきました」

「ほんまに？」

テンの声は一瞬弾んだが、すぐ元の調子に戻つた。

「でも、それでええんやで」

何がいいのか、僕には検討もつかない。しかしそれは次の言葉で明らかになった。

「自分、笑ったのなんて久しぶりとちやうっ！」

テンに言われて初めて氣がついた。そういうればどうかもしない。僕にはここ最近笑った記憶がない。それどころではなかつた。洋子とどうやって仲直りをするか、どうすれば許してくれるのか、そのことで頭がいっぱいだつた。それほど追い込まれていたということか。どうりで空回りするわけだ。

「笑いはな、辛さや悲しみを忘れさせてくれるんやで」

さう前置きしてテンは続けた。

「この闇に光を照らしてくれるもの、さうやな、笑いとは円のようなものかもしねへんな」

笑いは用？さつきの「恋人は太陽」の例えは見事だつたが、今度はどんな例えを見せてくれるのだろう。受話器を少し強く耳に押し当てる、テンの次の言葉を待つた。

「それはな、笑うことで気持ちが明るくなるからや。明るい気持ちは前向きにさせてくれる。前向きになれば道が見えてくる。つまりな、笑いによって生まれた明るさが進むべき道を照らしてくれんねん」

大失恋20　失恋すると忘れてしまうもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋21 笑うといつこと

僕は過去に笑ったときのことを思い出してみた。まず、笑いには対象があるといつこと。テレビや漫画を見て笑うのはそのいい例だろつ。

また、友達との会話でも笑ってしまうことがある。大抵はお互いの失敗談など身近な話題ではあるが、テレビや漫画と違うのは目の前に友達がいることでその場が明るくなるといつことだ。それは話している本人が明るくなつたような見えるせいかもしれない。

少なくとも僕の話に笑つてもらつたとき、僕はうれしくなる。彼にもつと笑つてほしくて話がしたいと思つ。

「笑うことで気持ちが明るくなるといつのはよくわかります。でも笑うためには対象が必要ですよね。テレビとか漫画とか。友達との会話でもいい。それを身近なものにすればもつと周りは明るくなりますよね」

自分でもよくまとまつていると懶つ。しかしテンの意見は違つて

いた。

「自分、笑いについて勘違いしてへんか?」

勘違い、だと?笑うことで明るくなる。もつと笑いたい、もつと

笑つてほしいと思つ」とで気持ちは前向きになる。だから笑う対象を身近に置いておく。それのどこが勘違いなのか。

「おもうじから笑うんやなく、笑うからおもうなるんやで」

テンの意見を聞いても今ひとつピンとこない。人はおかしくもないのに笑えるものなのか。

「笑う門には福がくる言つやろ? 笑うとな、樂しさや喜びなど明るくなるたくさんのが集まつてくるんやで」

笑うと楽しくなつて気持ちが明るくなる。明るいところには集まるので、それがさらなる人を呼びその結果「福」となるのだろう。それはわかる。でも、やつぱり笑うためには「対象」が必要なのではないか。もう少しテンの意見を聞いてみよつと思った。

「失恋したときは辛くて悲しくて、うつむいたり下を向いたりしてしまうことがあるかもしがれん。でもそれでは前に進まれへん。光は前から照らすものなんや。せやから失恋したときこそ、無理しても笑つて前を向かなアカンねんで」

「」ここまで聞いてようやく理解できた。笑う対象がなくとも無理して笑つてみれば、それを探して結局は楽しい気持ちに行き着く。ゴールは同じだつたんだ。

対象が大事なのでなく、笑うことそのものが大事だということ。笑うことが先で、対象は後でもいいのだ。

では笑つてみよう。福が寄つてくるどころか気持ち悪さを覚えた。何もないのに笑つているのである。周りから見たらおかしなやつと

思われるだろ?』この不自然さを解消しなければいけない。

「今笑つてみたんですが、ちょっと不気味でした。何もないのに笑うつて不自然で、周りが見たら集まつてくるどじろか離れて行つてしまふんぢやないでしょうか?」

「アハハ。そらそうやろ。何もないのに笑うてたら『大丈夫ですか?』って逆に心配されてしまうわ。ほんま、自分笑かしよるで」

お前が笑えつて言つたんだろ?と、僕は心の中で突っ込んだ。

「そうやない。笑いつてな、自分から働きかけて生まれるものなんや」

笑いは生まれるもの?自分からつて、僕が人を笑わせるのか?そんなセンス、持ち合わせていないのですが。

大失恋21 笑うといふこと（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋22 テン式失恋を乗り越える方法二か条

「どうので自分、今田コンビニ行つた?」
「はい、行きましたけど」

なぜコンビニが出てくる? 笑いとどういう関係があるのであります。

「店員にありがとうございましたって言われるところしくならへん?」

そりや悪い気はしないが。

「相手の笑顔につられて自分も笑顔になりやう?」

「あつ!」

「ウチが言いたいのは、笑顔の回数を増やすと言つことなんや。そのためにはありがとうの回数を増やすこと。ありがとう言つて暗い気持ちにはならへんやろ」

僕は今朝のコンビニでのやり取りを思い出した。会計を済ませると、たしかに店員は「ありがとうござります」と言つていた。しかし、それも言わても印象に残らないのは僕は商品を買つただけであり、そもそも百円のペットボトルである。特別なことは何もしていないし、店員にしてもマーカーの一つで言つているのだろう。これが例えば棚から落ちてあった商品を元に戻すところを見られ、そのときに「ありがとうござります」と言われたら少しはうれしいと思う。あとは店員がかわいい女の子で、満面の笑みでそう言われたら、その日一日はそれだけでハッピーになるだろ?。その他にもいろいろありがとうを考えてみた。

僕は笑っていた。さつきの不自然な作り笑いでなく、心から笑っていた。ありがとうの言葉は言つても言われてもうれしいものである。テンの言つ「自分から働きかける」とは、どんな小さなことでいいからありがとうの環境を作るということだったのか。

笑つたことで気持ちが明るくなつてきた。僕はもつとテンから学びたいと思った。ひとまずこれまで学んだことをまとめてみよう。テンから了承を得て、ノートを開いた。

「ええで、ええで。どんどんメモ取りや。でもウチのハートは取らせへんで」

早速教えられたとおり、と言つても無理して作り笑いをしながらペンを走らせた。

テン式失恋を乗り越える方法

- 一、別れを受け入れる
- 二、笑う
- 三、ありがとうと言つ

大失恋22 テン式失恋を乗り越える方法三か条（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋23 僕は変わるんだ

これまでのテンの教えを簡潔にまとめて見返してみた。うん。これならたしかに失恋を乗り越えられそうだ。そう思つたときだつた。

「自分、これ見て何か思わへん?」

「素晴らしいと思います。これ以上ないといふくらい、完璧な失恋を乗り越える方法だと思います」

僕は素直な感想を述べた。本当にそつ思つていた。しかし、すぐにテンからの突つ込みが入つた。

「当然やん。ウチを誰や思つてんねん。天使やで。天使のテンやで、つてちやうわ。そうやなくて、これ見て人と接する機会を多くせなアカンと思わへん?」

もう一度ノートを読み返みる。「一」と「二」はテレビや本など一人でも対応しようと思えばできるが、「三」のありがとうには相手が必要だ。つまり、テンの言つとおり本当に失恋を乗り越えたいのなら、これから僕は外へ出て人と接する機会を増やさなければならぬ。自分を変えなければいけなかつた。

これまではずつと一人だつた。仕事が終わればまっすぐ家に帰り、洋子に電話しては出てもらえず、その度に落ち込んでいた。会社でも洋子のことばかり考えて一人で過ごすことが多かつた。誰とも話さず、殻に閉じこもつていつも洋子のことを考えて自問自答していく。

それも今日で終わり。テンと田舎つて僕は変わるんだ。明日から少しづつ周囲に話しかけてみよう。少しでも笑ってありがとうと言える回数を増やしていくこと。やつは本当に話して言つたくなつた。

「テンさん

「何や?」

「ありがとう」

うん。いい感じだ。言つ前は恥ずかしもあるつたが、言つた後には心が晴れやかになつた。

「何や、ありがとう。照れるやないか

テンは本当に照れているようだつた。ありがとうと言葉は自分でなく相手も明るくさせてくれる。この調子で明日もありがとうと言つてみよう。そして笑う回数を増やしていくこと。

大失恋23 僕は変わるんだ（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋24 テン式失恋を乗り越える方法四か条

「どうや? 明日が明るくなつてきたやろ?」

僕はテンの言葉にうなずいた。これまで闇の中を手探りで進んでいたようなものだつたが、今は違う。闇の前には光がある。これからはそこを田指して進めばいい。

「そのノートに明日つて書いてみて」

唐突にテンは言った。このころにはテンを疑う気持ちはすっかりなくなつていたので、言われるままノートの余白に「明日」と書き、テンの次の言葉を待つた。

「明日は明るい日つて読まれへん?」

あつ! 本当だ! 改めて言われると明日は明るい日と読めてくる。

「元々誰にとつても明日は明るい日のはずやつたんや。それが不安や悲しみ、辛さなどの悲観的な感情が闇を作り光を覆つて暗いものにしてしまう。でもな、やっぱり明日は明るい日になるんや。明日とは自分が作るものやから」

少し目が潤んできた。僕はこれまで洋子に迷惑ばかりかけてきた。それが僕の明日を暗いものにしてしまっていた。闇に覆われ少しも明日は明るくなかった。

しかし、テンの言葉は闇を切り裂き、明日を本来の明るいものに

してくれた。僕はノートに書いた「明日」という字を少し強めに丸で囲った。明日は明るい日。そつづぶやきながら。

ようやく光が見えてきた。しかしテンの次の言葉は僕の明日を再び壊すことになった。

「ウチのこれまでの教えはノートにまとめるなどして、自分なりによく理解してくれていると思う。でもそれだけ守ればええというほど失恋を乗り越えるのは甘いものやない。実は、もう一つ自分が守らなアカンことがある。この二つが合わさって、初めてテン式失恋を乗り越える方法は完成する。そのとき自分はほんまの意味で、この失恋を乗り越えることができるんや」

前回の三つの方法だけではまだ不十分だとテンは言つ。失恋を乗り越えるのって、本当に大変だと思った。幸いにして僕にはテンがいるからいいけれど、他の人はどうやって乗り越えているのだろう。好きな人ってそんなに簡単に忘れられるものなのか。

そして気になるのはもう一つの方法である。一体どんな方法なのだろう。僕がこうして疑問に思うとき、テンは必ず予想外の答えを言つてくる。その心の準備だけはしておいた。

「自分が守らなアカンもう一つの方法とは・・・・・」

大失恋24 テン式失恋を乗り越える方法四か条（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください

大失恋25 洋子を思い出さない時間をどれだけ増やせるか

少し間を置き、テンは続けた。

「掃除や」

「は？」

心の準備をしておいてよかつた。失恋を乗り越える方法が「掃除」だなんて誰も思いつかないだろ？ しかしそれはテンのこと。必ず最後は「ゴールにたどり着く。

「前回の方法は人と会う機会を増やして笑ったり、ありがとうと言つてみること。でもそれはどこですんねん？」

「やつぱり会社や買い物など人がいるところ、つまり外でということになりますね」

それはそうだろう。人は外にいるものである。

「ほんなら笑顔になつて、ありがとうと言つて家に帰つてきいたらどうすんねん？」

家に帰つてきたら？ まさか・・・。ゆっくりと視線を移してみる。何度見ても日を覆いたくなる光景がそこにはあった。これではせつから外で明るい気持ちになつても、すぐにまた暗黒の闇が押し寄せてきそうだ。

「そう言えば部屋は心の鏡やつて、誰か言つとつたな」

それが誰なのかは知らないが、見事に言い当てていると思つた。

僕の部屋はぐちゃぐちゃだ。それは心がぐちゃぐちゃしているからだらう。

僕の部屋は汚い。それは心が汚れているからだらう。

僕の部屋は片付いていない。それは心が整理されていないからだらう。

心は見えないが、部屋は目に見える。この失恋によつてどれほど心が荒んでいたか、自分の部屋を見て改めて思つた。

「でもそれならやで、部屋をきれいにすれば心もきれいになると思わへん?」

「えつ?」

テンの問いかけは実に明快且つ単純だつた。そうだよ。部屋が汚ければ掃除をすればいいじゃないか。部屋が心の鏡なら、部屋がきれいになれば心だつてきつときれいになるはず。だから失恋を乗り越える最後の方法が「掃除」なのか。何と素晴らしい教えなんだ。

「ええか。そろそろまとめに入るで。外へ出たらできるだけ人と触れ合い、笑つたりありがとうと言つたり努めること。家では整理整頓、汚れを磨くなど徹底的に掃除に集中すること。大事なことやからもう一度言つけど、徹底的にやで。徹底的に何かに集中することで失恋による苦しみも悲しみも入つてこなくなる。洋子を思い出さない時間をどれだけ増やせるか。その分だけ失恋は遠ざかっていくや」

さすがにまとめてあつてか、テンの声には熱がこもつていた。僕

のためにここまで熱くなってくれる人がいる。その期待には応えた
いと思った。人を悲しませるのも、自分が悲しむのも、もううんざ
りだ。

確認も兼ねてもう一度「テン式失恋を乗り越える方法」に目を通
す。そして最後の方法を書き込んだ。

テン式失恋を乗り越える方法
四、掃除をする（徹底的に）

大失恋25 洋子を思い出さない時間をどれだけ増やせるか（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋26 失恋を乗り越えるのに掃除がなぜ有効なのか

掃除をする、掃除をすると何度もつぶやいてみる。すると「ある疑問」が浮かび上がってきた。

掃除とは目の前にある散らかったもの、汚れたものを掃除するだけでいいのだろうか？「テン式」というからには、掃除にも何かこだわりのようなものがあるのではないか。早速聞いてみる。

「そやな。掃除をやれ言つても漠然としどるかもしだへんな。そもそも自分、徹底的に掃除なんてやつたことないんとちやう？勢いだけでは長続きせえへん。それが習慣になるまで続けな、すぐに失恋は迫つてくる。掃除を止めた途端に洋子を思い出したら大変や。よし、ウチが人肌脱いだる！テン式掃除のイロハを叩き込んだる！」

ノートに書いた「四、掃除をする（徹底的に）」の下に、テン式掃除のイロハを書き留めた。

テン式掃除のイロハ

- 一、窓を開ける
- 二、整理整頓をする
- 三、水周りを清潔にする
- 四、不要なものはどんどん捨てる
- 五、磨く

それぞれの効果についても、併せてテンは説明してくれたので簡単にまとめてみる。

「一、窓を開ける」について、閉め切った部屋は空気の逃げ場が

なく、塵や埃も溜まりやりくなるためどんどん汚れていく。その中で過ごせば健康に害があるばかりか、心まで汚れていってしまう。空気は目に見えないので、汚れているかどうかわからない。だから意識的に換気をしなければいけない。例えば帰宅時や起床時。その他気がついたときなど。

「空気感」という言葉がある。僕はこれまでいくつかの職場を見てきたが、たしかに業績が上がっていないところは職場の雰囲気がすこぶる悪かった。逆に業績好調な職場はとにかく明るい。スタッフ同士の仲がよく、僕も連絡先を交換した人が何人もいた。

これまで僕は空気を侮っていた。テンの説明を聞いてバカにできないと思った。「あれ？何かおかしいぞ？」。そう思つたら窓を開けてみよう。こんなに簡単なことで物事が良い方へ働くならやってみる価値は十分にある。

「一、整理整頓をする」について、簡単に言えば元にあった場所へ戻すということ。例えば脱いだ服は洗濯機へ入れる。干した洗濯物はタンスにしまう。食べ終わった食器はすぐに洗うなどなど。

当たり前といえば当たり前である。しかし、当たり前のことほど人はできないものである。

「玄関は常に清潔にせなアカンで」

玄関の掃除についてはテンから念を押された。玄関を清潔に保つことで福が入りやすくなるのだという。たしかに人は玄関を通って外へ出たり部屋に入ったりするわけであり、福がそうであつてもおかしくはない。

そしてここからが整理整頓の本領發揮だった。その習慣が身に付ければ、思い出を心の引き出しにしまうことができるといつのだ。この部屋を見渡すかぎり、僕はそれが何一つできていない。だから洋子に電話してしまつのだ。

「三、水周りを清潔にする」について、水も空気同様同じ場所に止まると汚れていく。ただ空気と違うのはそれが目に見えるということ。カビの発生がいい例である。

水は蛇口から排水溝へと流れていく。その流れが止まってしまうから水は止まり、カビになつていく。流れを止めてはいけない。いつでも流れていけるよう、道を作つていかなければいけない。

水周りと聞いて次の箇所を思い浮かべた。シンク、トイレ、風呂場、洗面所。特にトイレ掃除の効用については出版もされているほど有名だ。誰もが嫌がることを率先してすることで周りから信用を得て、仕事がうまくいったり幸せになつたりと、たしかそんな話だつたように思う。

幸せになる方法があるなら、何でもやつてみようと思つた。やつてみて結果が出なくとも、それをしている間は洋子を忘れられる。結果が出ればなおのことといい。今の僕は例えるなら流れの途中で止まっているカビだらう。どんどん繁殖して、それで洋子を傷つけた。自分を変えるためにもカビを見つけたら早急に、カビになる前に常に流れはよくしたい。この流れはきっと幸せへと続いているはずだから。

「四、不要なものはどんどん捨てる」について、捨てることでその場所に空間ができる。読んでいない本、着ていない服、何年も使つていないもの。それらを捨てればその場所に空間ができる、次の新

しこものを置くことができる。空氣や水同様、止まるものは汚れていく。

これは何も部屋だけのことと言つていいのではない。心だってそうだ。僕の心は新しいものが入つてくる隙間もないくらい、洋子のことでいっぱいだ。だからダメなんだ。洋子との思い出を捨てることは難しいけど、部屋の掃除を通して残しておくるものと、捨てるものを見極めよう。必要なものは捨てるにかぎるのだ。

「五、磨く」について、磨けるものには自分の姿が映り込む。そうならないのは汚れているせいである。それを心だと思って、自分の姿が映り込むまでとにかく磨く。そつすればきれいになつて気持ちがいい。心までピカピカになる。

家にある磨けるものについて思い浮かべる。換気扇、ガス周り、鏡、ドアノブなどの貴金属、床くらいだろうか。そういうえば洋子が遊びに来る前の晩、僕はいつもフローリングにワックスをかけていた。流した汗が気持ちよく、テンの重つとおり心までピカピカになつたことを思い出した。

大失恋26 失恋を乗り越えるのに掃除がなぜ有効なのか（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋27 もう一度やり直したいって思つどつたんやろ

「いやして、『テン式掃除のイロハ』をまとめてみると、すべてが心に通じており失恋を乗り越える方法につながっていることがよくわかる。最初聞いたときは「？」で頭がいっぱいだったが、さすがはテン。最後はちゃんと『ホールまで導いてくれる』

「テン式掃除のイロハとその解説のおかげで、何をすればどういう効果が表れるのか、大変よくわかりました。掃除はちゃんと失恋を乗り越える方法につながっていたんですね。早速この後に取り掛かりたいと思います」

「ええ心がけや。そう、できることとは今すぐこやる。思い立ったが吉日やで。そつしなければでけへん。明日やあいつの『明日』はいつまでもやつてへむ」とねあらへんのやから」

明日は自分で作るものである。テンのおかげで僕の明日は輝きに満ちていた。

「ほんなら一週間後、経過報告を聞きにまた電話するわ」

そう言つてテンは電話を切つとしたが、僕は待つたをかけた。どうしても聞いておきたいことがあつたのだ。

「何や？質問もあるんかいな？」

「いえ、質問はありません。テン式失恋を乗り越える方法は行動に移せるほど具体的で、且つ効果が明確なので今すぐにでも取り掛かりたいくらいです」

「だつたら何や？」

「どうしてテンさんはここまで、見ず知らずの僕に親切にしてくれるんですか？友達でもここまでしてくれた人はいなかつたのに」

「何や、そんなことか」

一呼吸を置いて、テンは続けた。

「最初に言つたやる。自分、このままやつたらダメになるで、つて」

それはそうなのだが、まだ僕の求める回答に至つてはいなかつた。

「この電話はな、純粋な気持ちを持つとる人にしかつながらへんねん」

これまで洋子に散々迷惑をかけたこんな僕でもテンには純粋に見えるのだろうか。

「自分、洋子に謝りたかったんやろ？自分の非を認めて、悔い改めてもう一度やり直したいって心から思うとつたんやろ？一人が強く結びついていたあの日にもう一度戻りたかったんやろ？実はな、洋子もそうやつたんや」

衝撃だった。今では電話に出てくれない洋子にもかつてはそんなことを思つていた時期があつたのか。

「純粋な想いつてな、天まで届くんや。それを知つてか知らずか人は何があると空を見上げて祈りよるやろ？無意識レベルではそれがわかつとる。後は想いの強さなんや。自分の想いも天まで届いてきよつたで。でも、アカン。弱かつたわ。洋子は自分に電話する前にウチまで届いて何とかなつたけど、自分は間に合わんかった。そ

「でも洋子に負けとつたな

大失恋27 もう一度やり直したいって思つたんやろ（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋28 洋子が本当に求めていた言葉

たしかに洋子は負けず嫌いだった。僕は洋子と電話を切る前の会話を思い出した。

「好きだよ」

電話を切る前にそう言わないと、洋子は決まって駄々をこねる。そして寂しそうにこう言つのだ。

「・・・・今日は言つてくれないの？」

しかし、その言葉を口にすればうれしそうに「へへっ」と笑い、その調子のまま次の言葉を言つ。

「でも、私のほうがもっと好きだからね」

「いやいや、オレのほうが好きだよ」

「違うもん。私のほうが好きだもん」

おやすみの代わりの「好きだよ」を言つて切るつもりの電話が、それを繰り返しているだけで一時間以上延びてしまふことも度々あつた。

こんな日もあつたな。かつての僕たちを思い出すと、自然に涙が零れ落ちる。

「でも、自分の想いは天にいるウチにまで届いた。付き合つた二人の片方に教えて、もう片方に教えへんのって不公平やろ。ウチ、天使やし。天使は平等にせなアカンやん？」

天使かどうかはともかくとして、僕を心配してくれる人の存在はありがたかった。少なくともこれで一人ではない。洋子もテンの教えによつて失恋を乗り越えたみたいだし、今度は僕の番だ。ノートに書いた丸で囲つた言葉が目に入る。よし、明日を明るい日にしてもやろう！

「わかりました。では一週間後、朗報をお伝えできるようにがんばります」

「ほんならね」

そう言つてテンは電話を切つた。受話器から聞こえる「ツー、ツー」という音が不思議な時間の終わりを告げた。

「・・・・・、ほんならね?..ビ」かで聞いたことがあるよつな・・・。

このときテンが言つた「ほんならね」。この言葉の本当の意味を知るのはもう少し先のことだった。

大失恋28 洋子が本当に求めていた言葉（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋29 一人でいても何も変わらない

テンとの不思議な電話から一週間が過ぎ、ついに約束の日を迎えた。今日テンから電話がかかってくる。この日のために、テンの教えを忠実に守つて僕は自分を変える努力をしていった。

外では周囲と積極的に交わっては笑い、ありがとうを繰り返した。テンが言っていた「自分から働きかける」という言葉を意識し、進んで行動していった。

もちろん最初はためらい、戸惑つたりもした。仲のいい同僚やお世話になつてている上司とだけ話そうとも思った。

でも、それでは変われないような気がして、テンに申し訳なく思つた。どうせなら職場にいる全員に話しかけよう。でもどうやって？「面白いから笑うのではなく、笑うから面白くなるのだ」。テンの教えを思い出し、「作り笑い」をしておかしな理由を考えた。

周囲は面食らつていた。それはそうだね。これまで殻に閉じこもつて接触を持とうとすらしなかつたこの僕が、進んで全員に挨拶をしているのだ。

でも、そんなの関係ない。周りを気にする余裕など僕にはなかつた。僕を応援してくれているテンのためにも、約束の日までに何としてでも変わりたかった。裏切るのは洋子で最後にしたかった。

不思議なもので、何日も繰り返していると最初は挨拶だけだったのが、自然な会話も生まれてくるようになった。そして作り笑いで

ない心からの笑顔が生まれるようになり、徐々にではあるが僕の周りに人が集まるようになってきた。

これまで一人でいても何も変わらなかつた。一人であるが故に考えすぎて、気持ちは暗くなるばかりだつた。それが今はどうだ。周りに人が集まり、その顔には笑顔がある。雨雲は去り、陽射しが差し込んだかのように目に映るものすべてが明るく見えた。

待つっていても何も変わらないことを知つた。誰かが何かをしてくれるわけではない。失恋したのは僕であり、僕自身が立ち上がらなければならない。

テンからアドバイスはもらつたが、それを行動に移して失恋を乗り越えるのは僕なのである。自分から働きかけて「笑い」と「ありがとう」を繰り返したことでの周りは変わつた。しかし、周りを変えたのは中心にいる僕なのである。

大失恋29 一人でいても何も変わらない（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

大失恋30 失恋の苦しみは家中にある

レバして外で前向きになれたのも「掃除」のおかげだった。テンとの電話の後、すぐに窓を開けた。「テン式掃除のイロハその一、窓を開ける」である。この汚れた空気を外の新鮮な空気と入れ替えて部屋全体を、そして僕自身をリフレッシュさせる。

しかし最初は思うようにいかなかつた。新鮮な空気はたしかに入ってきたが、それは凍てついた空気だつた。無理もない、真冬の深夜過ぎの空氣である。気温は軽く零度を下回つていただろう。

それでも不思議と窓を閉めよつとは思わなかつた。それより先に思つたのがこのまま体を動かさなければ風邪を引いてしまうということだつた。すぐに「掃除のイロハその二、整理整頓」を全力で取り掛かつた。

脱ぎっぱなしの服は洗濯機へ、布団はもうすぐ寝るけれどとりあえず押入れへ。雑誌類は本棚へ、床に散乱しているすべてのものを本来あるべき場所へ片付けた。

「僕の部屋つてこんなに広かつたっけ?」

部屋の入り口に立ち、全体を見渡してみると部屋が広く感じられた。これに要した時間は五分弱。たかだが五分弱を疎かにしたためにこれまで気持ちが乱れていたのか。

動けば変わるものである。部屋を整理整頓したことで僕の心の散乱物も片付けられたのかもしれない。気持ちは前向きになり、次の掃除のイロハに取り掛かつた。

そういうしているうちに外は明るくなり、気がつけば出勤時間が迫っていた。結局この日は一睡もせず出勤することになり、家での勢いはそのまま外でも続いていった。

失恋の苦しみは家中にある。外に出れば周りに人がいて、会話をしたり体を動かしたりすれば気は紛れるが、家では逃げ場所がない。テレビを見ても、音楽を聴いても上の空。思い出すのはどうして失った洋子のことばかり。でも、失恋した者に対してテンは革命的な家での過ごし方を伝授してくれた。「掃除」である。

僕はすっかり掃除の虜になっていた。掃除をすれば部屋がきれいになる。部屋がきれいになれば気分がよくなり、その調子は外へ出ても継続される。テン式掃除のイロハを一通りやってみた中で特に好きだったのは「五、磨く」だった。

あれは換気扇のカバーを外したときのこと。

「何じゃ、こりゃ？」

どうすればここまで汚れるのか、その汚れ具合に思わず二、三歩退いてしまったほどである。と、同時に、

「これって、落ちるのか？」

原型がどんな色なのかさえわからないほど、びっしり汚れがこびりついている。この家に住み始めて一度もカバーを外した記憶がないのに、油や煙草の煙を毎日吸い込んでいるわけだからこいつなるは当たり前といえば当たり前だ。

やはり洗剤を使って磨いてもなかなか落ちなかつた。でも、僕はあきらめない。よし、明日量販店へ行って換気扇用の洗剤を買ってこよう。AがダメならBの手がある。それがダメならCの手で、それでもダメならDの手を探せばいい。

この汚れはどうしても落としたかった。ここであきらめてしまつたら、またあの暗闇に逆戻りしてしまつ。そんなのは絶対に嫌だ。それにテンとも掃除をすると約束した。約束は何が何でも守らなければならない。僕がここまで思うのは、もう裏切りたくないという気持ちと一度裏切つてしまつた後悔が心に根強く残つているためだ。あれは洋子の誕生日のことだった。

大失恋30　失恋の苦しみは家の中にある（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

大失恋3-1 ケンカが絶えなくなつたのは

当時の僕たちはケンカが絶えなかつた。口を開けば相手を責める言葉ばかり。出会つたころは相手の意見を尊重して「どうぞ、どうぞ」と譲ることしか考えていなかつたのに、いつから自分を優先するようになったのか。

それでも僕たちの関係が途切れなかつたのは、出会つたころから変わらないものがあつたからだ。「好き」。僕は洋子が好きで、洋子もきっとそうだと思う。ただ付き合いも長くなり、自分の気持ちを素直に伝えられなくなつっていた。

明日は洋子の誕生日。それなのに一週間近くも会うどころか電話も、メールすらしていない。この前の電話でもまた些細なすれ違いからケンカになつてしまつて連絡しづらく、時間だけが過ぎていつた。

誕生日を前日にして僕は思った。「このままでいいのか」。連絡しづらいからと、このまま何もせずに明日を迎えてしまつていいのか。明日は年に一度の洋子が主役の日。そう思つたら相手を優先する当時の気持ちが沸々と湧き上がつてきた。出会つたころのように洋子にこの気持ちを伝えたい。

今しかないと思つた。受話器を取り上げ、短縮ダイヤルを押した。

「はい」

受話器から聞こえてきた声は、僕の知つてゐる明るい洋子ではなかつた。泣いてゐるのか？

「「」めん、なかなか電話できなくて」「うん、いいの。お仕事大変なんでしょう？」

電話しなかつたのを非難され、責められるものと思い身構えていたのだが、返ってきた返事は予想外のものだった。ケンカは嫌だけど、こんな冷たい返事ならまだ怒られるほうがましだ。

「明日、食事にでも行きませんか？」

緊張のせいか、思わず敬語になってしまった。

「いいよ、無理しなくても」

「男は無理するものだろ？」

明日は、明日だけは無理をしてでも洋子を祝いたかった。

「あ、その台詞、出会ったころよく言つてたよね？」

洋子の声のトーンが少し上がった。よし、ここが攻め時だ。

「何食べたい？」

「甘えてもいいの？」

その声には恋した女性特有の甘つたさがあった。出会ったころによく聞いたあの声だ。少しづつではあるが本来の洋子に戻りつつあつた。

「いいよ、星の王子様が何でも望みを叶えてあげる」「それじゃあね・・・和食がいいかな。竹がカーネンとする

ヒカル

いいぞ、いいぞ。その調子だ。

「わかつた。それじゃ予約入れておくれよ

「うん。楽しみにしてるね」

ケンカばかりしているけど、それは寂しさ故であつて本当はお互い好きなんだよな。

電話を切つた後もしばらく洋子の声に浸つていた。洋子に寂しい思いをさせるのは、僕の舵取りが悪いからだ。そう、悪いのは全部僕。洋子は何も悪くない。これまでの罪滅ぼしも兼ねて明日は洋子に喜んでもらおう。そして出合つたこの気持ちを取り戻すんだ。

大失恋3-1 ケンカが絶えなくなつたのは（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守つてください。

大失恋32 誕生日おめでとう

誕生日当日、僕は予約の時間より三十分ほど早く和食屋のある最寄り駅の改札で待っていた。早く来たのはせめてもの誠意を示したかったからだ。

仕事はまだ片付いていなかつたが、明日の朝一番で会社へ行つてすればいい。最悪上司に怒られるだけだ。それよりも今日だけは、今この時間だけは洋子と一緒に過ごしたかった。

駅の改札は帰宅ラッシュと重なつて混雑していた。僕たちの待ち合わせ場所に改札が多いのは、洋子が極度の方向音痴だつたからだ。駅でも平氣で北口と南口を間違える。和食屋の住所を伝えたところで到底たどり着けるとは思えない。ましてやその和食屋は入り組んだ路地にあり、駅からは徒歩十分ほどの所にある。

ようやく見つけた和食屋だつた。昨晩、洋子との電話の後に探したが、和食屋はそれなりにヒットするもののもう一つのリクエストである「竹力コーン」がなかなか見つからなかつた。睡魔に襲われ、目がチカチカしてくる。洋子には申し訳ないが、ごめんと謝り和食だけを堪能してもらおうかとも思った。でも、明日は洋子が主役の日。洋子に喜んでもらいたかった。何としても洋子のリクエストに応えたかった。検索方法をいろいろ変えてみて、それが見つかつたころには外が白み始めていた。

洋子が到着したのは僕の十五分後、つまり予約時間の十五分前だつた。僕を見つけると満面の笑みで手を振つた。その姿を見て僕はダッシュで駆け寄り洋子を迎えて行った。少し息を切らせた僕に洋子はさつきより輝きを増した笑顔で聞いてくる。

「待つた？」

それにしても・・・。洋子と会うのは久しぶりなわけだけど、こんなにきれいだったっけ？女性は恋をすると、体内から活発になつた成分が分泌されきれいになると聞いたことがあるが、今の洋子はそれなのか？

「ねえ、聞いてる？」

そう言つて腕を突付かれるまで、僕は洋子に見惚れて会話が頭に入らなかつた。

駅から和食屋へは少し距離がある。久しづりということもあり僕はもちろん洋子も緊張のせいか言葉少なめだったが、到着後竹力コーンを見つけると洋子のテンションは一気に上がつた。

「本当に探してくれたんだね。やつたー」

しばらくして仲居さんが料理を運んで来てくれた。テーブルに置かれた和食の数々。食べるのがもつたいないほど彩が鮮やかだつた。僕は箸に手をかけたが、今日は洋子が主役の日。先に進めた。

「お先にどうぞ」

洋子は小鉢に箸を伸ばし、口へ運んだ。僕を見ると微笑んだ。よかつた。どうやら喜んでくれたようだ。

これで洋子の二つの願いは叶つたことになる。同時にそれは僕の願いも叶つた瞬間だつた。洋子に喜んでほしい。僕は洋子を見た。

視線に気がついた洋子は見るなりまた微笑んだ。僕はまた思つた。
よかつた。

料理がある程度片付いたのを見て、僕はかばんから取り出したものを洋子に手渡した。

「誕生日おめでとう」

昼休みを利用して選んだ誕生日プレゼントだ。

さつきまで上機嫌ではしゃいでいた洋子は寡黙になつた。手にしたそれをしみじみと眺め、そして消え入りそうな声で言った。

「開けてもいい？」

大失恋32 誕生日おめでとう（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5839y/>

大事なことはすべて失恋から学んだ

2011年12月27日22時53分発行